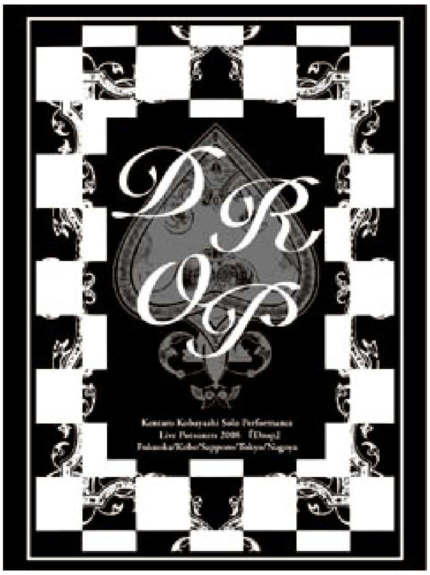
賢太郎 劇場に ご招待 ②

Kentaro Kobayashi Solo Performance

Live Potsunen 2008 『Drop』



２００８年４月１０日（木）雨
三軒茶屋･世田谷パブリックシアター　シアタートラム
１９時開演

小林賢太郎は、他分野の人たちと活動をしている。
小島淳二との映像製作ユニット＜NAMIKIBASHI＞
升野英知との大喜利ユニット＜大喜利猿＞
田中知之との音楽ユニット＜SymmetryS＞
舞台役者たちとの演劇プロジェクト＜KKP＞がある。

今回は一人きりの舞台　＜Potsunen　ＤＲＯＰ＞
「○－ｍａｒｕ－」「ｐｏｔｓｕｎｅｎ」に続いての
第３弾。
北海道公演が終わって東京に向けて賢太郎は私に
（ファンに）メッセージを発した。

さあ、今度は東京公演だ。これから「DROP」が
どう完成していくのか、僕自身も楽しみです。
その為には隙間なくコントと向かい合うんだ。
観てて下さい。コントバカを。
コントバカっていうか、バカを。

その言葉を受けて「ＤＲＯＰ」の名にふさわしい雨の中三軒茶屋へ。７００人も収容されるわりにどこからでも舞台が近く感じられそうな、雰囲気のある素敵なホール。さてさて、そそくさと１０列目へ。おぉー、舞台すぐそば。

一人きりで２時間の舞台は軽いコントで始まった。
無人島に流れ着いた男と、男が拾ったドロップ缶から出てきた江戸っ子の魔法使い。
３つの願い事を叶えてくれるということが信じられずにいる男に魔法使いは、じれて帰ろうとしてしまう。
そこで「待って」と言ってしまって、それがひとつめの願い。
２つ目は「家に帰りたい」で、狭いアパートに戻る。
３つ目は「もっと広いところに行きたい」
で、もとの無人島に戻ってしまうという短めのコント。
下手に移動。
一年に一文字しか話せない男が、大好きな人に「あいしてる」と伝えるために、５年分の言葉をためて告白のときを待つ。
いざ告白のときに女性を呼び止めてしまう。「すみません…」。

小学生のサダ吉くんと魔法使いに人間と話が出来るようにさせてもらった蛾の話を根底に流しておいて、絶対台本どおりの言葉をアドリブっぽく言いながら、コントやカード遊びや音作り、ＤＲＯＰ（雫）をテーマにした映像とあわせた動きなどのコンテンツがテンポよく進む。

ひとつのコントが終わるたびに、舞台上の机の引き出しにしまってある鏡と櫛で髪型を直して別人になる。それだけで、前のキャラを引きずることもなく次のコントに行く。
そんな風に演じたキャラは２０人（喋れる蛾も含む）以上。
ジャケットを脱ぐときも靴下を脱ぐときでさえも、賢太郎は演じる。ハンガーをズボンの後ろのベルトにぶら下げてから、脱いだ上着を落として掛けるとかね。
そうして賢太郎は最後まで舞台から引けることはなかった。

スクリーンの映像にあわせてアトムになったり、雫をバケツで受け止めたり

<アナグラムの穴>というカード遊びのときの賢太郎の相棒は、手元を映すカメラと中央の大きなスクリーン。それに毛虫。
目の前のカメラでカードを映し、それが正面の大きなスクリーンに映し出される仕組み。
例えば《アンモナイト》と並べたカードを《安易な友》に並び替えて、カメラを賢太郎に戻し、一言「日本人全員から一円ずつ集めればいいんじゃん」。おー安易！
そしてまた《アンモナイト》に戻して「求肥と、寒天と、黒蜜と…

毛虫と賢太郎

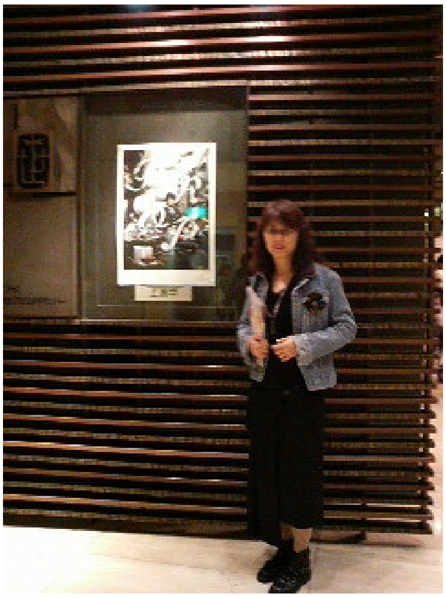
あっ、餡も無いと！」とあんみつの材料になり《あとないもん》で終わる。

《ひねて口の回る変な毛虫　揃う音は使い切り　増やせぬ故にさあ試す　ほらこれを見よ》（読みにくいから漢字にしたけど、全部カードは平仮名）

と並べる。みんなが読んだ時間をとってからカードを順番に拾っていき、再び並べられたカードは見事に　あいうえお…　と５０音になっている。カードを取りあげる順番を間違えずに綺麗な指がさらさらさらと言葉を作り出していく見事さ。ん〜、圧巻！

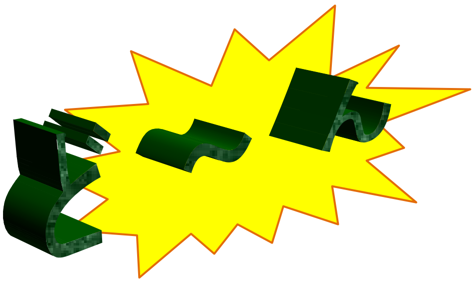
次は、ケンイチ少年が怪人５０面相の屋敷に忍び込む話。舞台上の机やロッカーに入っているよく見かけるもので、ナレーションに合わせて効果音を作っていく。
クシュクシュのテープが入った箱で足踏みをして【草むらを分け入る】ゴム手袋を膨らませて、表面をこすり【重いドアを開ける】ガラス瓶を電動歯ブラシにあてて【電話のベル】扇子をこすって【マッチを擦る】扇子でマイクに風を送り【心臓のどきどき】…
コント師は日常生活でもこういうこと試しているのでしょう。

最後は高い位置から綺麗な姿勢で後ろ向きにＤＲＯＰ（落下）して終わる。
「現実的願い」と「非現実的願い」、「現実的」と「現実」の切なさは、なにものにもならない未来を選んだ蛾や、自転車になりたかった定吉くんによって伝わってくる。
ＤＲＯＰ　ＯＵＴした登場人物が持つそんな切なさは、この公演のタイトル、ひとりポツネンとしているものに通じる。
あっという間の２時間。コントバカを満喫して会場を出た。
ポスターの前で麻生に写真撮ってと頼んだら恥ずかしそうに急いで携帯で撮る。ゆっくりデジカメで撮ってもらいたかったのに、撮る方が恥ずかしがる珍しいパターン。



観ていただいた２時間、あれが僕の精いっぱいです。
「エンターテインメントってどういうことか」生意気にも、
これが少しだけ分かった気がしました。
この感覚を逃したくない。しっかり目を開けてないと。
次は名古屋。これが DROP ツアー最後の地。待ってろミソカツ！

その言葉とともに賢太郎はミソカツのもとに行ってしまいました。
でも私と賢太郎にはまだ次の約束がある。



大喜利猿　※

２００８年４月２２日（火）晴れ
有楽町・よみうりホール
１５：００開演

升野英知（バカリズム）と賢太郎の二人だけでする大喜利。ただそれを繰り返す舞台、大喜利猿。最初は東京、沖縄、札幌、大阪でそれぞれ『衣』『食』『住』『等』のタイトルで４回だけ行う予定だった。
東京の『衣』にはずれてがっかりしてたら東京だけ追加公演がきまり、見事当選（友達が）。

追加公演がトップに来るというへんな始まりの大喜利猿。タイトルは『※』。
この公演では何よりも当たった席が肝心。なんと**一列目！！**
今まで浜省のコンサートのチケットを裏の手で取っていたときも最高は７列目だったのに繰り返すが、なんと**一列目！！**
天に昇る気持ちというより、どーしよーと困惑だけが先に立った。だって、いやでしょー、一番前に年くった人がどーんと座ってちゃ、賢太郎だって。
周りの人にしても、こんなでかいのが一列目じゃ。……賢太郎に関してはとても謙虚な私。
なんてぐだぐだ思ってて席に着いて横を見たら、どう見ても私より年くったみょーな眼鏡かけてる地味な着物着たおばさんがいた。その隣にはゴスロリ系の格好をしたお嬢さん。
な、なんなんだー、この二人の関係は！？なんて思ってたら、さりげなく登場、のっぽさんとちっちゃい影。そのとたんに、一列目の申し訳なさもゴスロリもぶっとんだ。

コバザル（賢太郎）とヒデザル（バカリズム）の二人とも巨人のユニフォームを着て登場。
さすがよみうりホール。一人は阪神にでもしてもらって、読売の深さを思い知りたかった。
洒落がないね、読売。第一、賢太郎に似合わないじゃない、野球も巨人も。
舞台には、上手と下手に机とカメラがそれぞれに一台ずつ置いてあるだけ。大量のボードにお絵かきで答えを書いていきその内容がスクリーンに映るといったもの。照明は暗めで机のある位置にスポットライトがあたっている状態。
どこが猿かというと、コバザルといった呼び方と答えるときに「うきっ」って言うとこくらい。（なぜ猿かというのはちょっとお品のよい私の口からは言いにくい）
残念ながら賢太郎は私から離れた上手に行ってしまったけれど、それでも十分近い。
だって一列目ですもの。舞台を見上げる位置なんですもの。

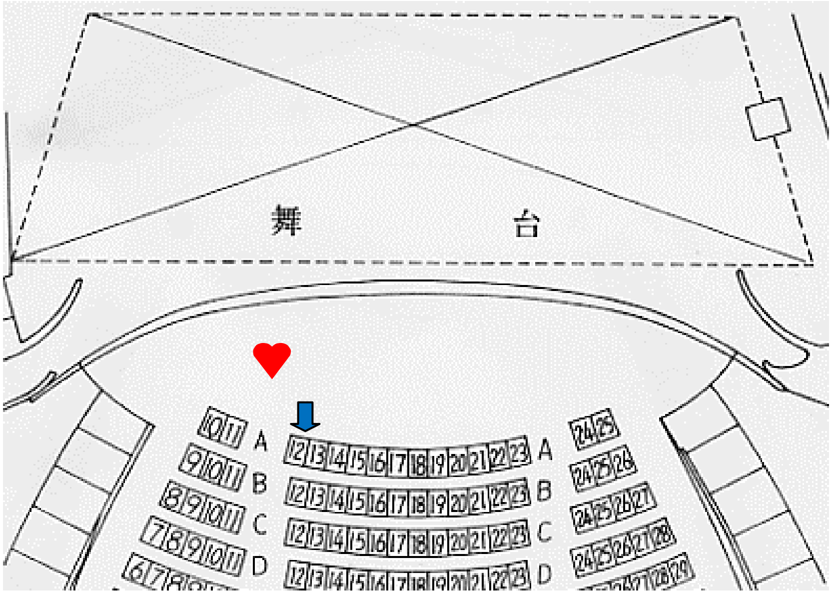
『大喜利猿第３巻』を執筆中の
ヒデザル　　と　　コバザル

＜　今の形になる以前のバットはどんな形だったか　＞
＜　今日の校長先生、どこかが違う、さてどこが　＞
＜　小林製薬の新商品はなにか　＞など１５くらいのお題が次々に出されていく。

会場を埋めた１１００人はひたすらコバザルとヒデザルの答えが書きあがるのを待ち、その間はペンの音だけが流れる。
回答としてはヒデザルの勝ち。でも、印象に残った好きな答えは何かと訊かれたら賢太郎の回答になっちゃう。どーしてもそうなっちゃうよねー。
「暴れん坊所将軍が暴れなくなった理由は？」のお題のときに、お題が妙に面白いとだめなんだよなぁってコント師らしい発言。

『言葉のキャッチボール』だけは趣向が違っていた。最初と最後の台詞が決まっていて、

見えないボールを投げながら台詞を返していき、最後の台詞に持っていく遊び。
例えば、ＩＮの「**ゆうべ夢を見たんだ**」の台詞で始まって、ＯＵＴの「**金持ってんなー**」で終わる会話をエアーキャッチボールをしながら作っていく。



その遊びのときに、５段の階段を下りて私（Ａ１２⬇）の前を通ってすんごく近くに来られた！（♥の場所)。もぉ大感激！！！！！
捕まってもいいから、３歩歩いて抱きしめてしまおうかと。

いゃ、ちゃんとしたオトナだからそんなことは思っただけでしなかったけど、朝までは一列目の席が恥ずかしいやら申し訳ないやらで気が重かったことなどさっぱりと忘れてこの距離にひたすら感動してた。ただ近すぎて凝視が出来ない。ずっと賢太郎を見ていたいのにエアボールを投げるからそっちも見ないと変だし、だってオトナだし。

舞台から降りてお題を見た賢太郎は、考えて作る遊びじゃないにも関わらず、始める前に客席に背を向けて言葉の流れを考え始め、ま、やってみようかと見切り発車した。そして始めたら面白いからって、準備をしていないスタッフに新しい言葉の組み合わせを要求。
新しく形を変えていきながら舞台を作っていくところは賢太郎っぽかったけど、考えぬいて台本を書く人は即興や瞬発力が必要なものは苦手だと思う。
それは去年のトゥインクルライブに行ったときにも思った。賢太郎はきちんと作り上げたものの方が面白い。きちんとした台本があるからアドリブも生きるわけだし。
この舞台は、お客さんを楽しませるより自分たちが楽しむって印象。たまには天才コント師もこういう緩さを楽しみたいらしい。

最近、ＮＨＫでバカリズムのコントを見た。そのコントのあとに「コントというのはファジーさが大事、あまり細かく演ってしまうとそれは芝居になってしまう」という楽太郎師匠のアドバイスに大きく頷いていたバカリズム。シュールなコントを芝居のように書く賢太郎にはありえない話。

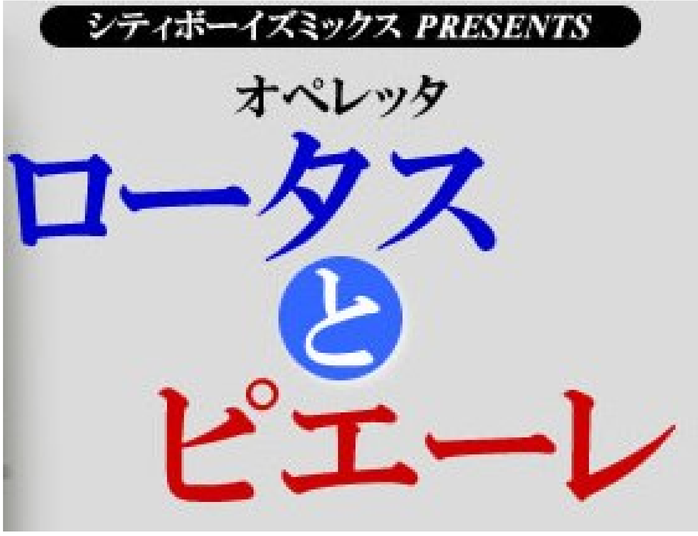
『猿』の相手にバカリズムを選んだのは、アドリブが苦手な片桐仁じゃ絶対に出来ない遊びだし、自分にない緩さを望んだってことかな。

賢太郎はフィルムでも遊んだ。
最初のフィルムでは＜大喜利猿、今日で解散＞と
お得意の「リアル嘘」を流して、最後のフィルムでは
＜二時間後（夜の部）に再生＞。
フィルムでも大喜利でもＸＪＡＰＡＮのコンサートを絡めて
最後まで遊んでた。
楽しむ賢太郎も、油断してる賢太郎もたまにはいいかも。なんたって一列目だったし。

オープニングフィルム
※が段々Ｘに変わっていく

さて、「ポツネン」「猿」と見てきて次はもちろんラーメンズ！
人のよさそうな緩いヒデザルさんも悪かないけど、やっぱり
小林賢太郎の隣には片桐仁が一番似合う。うきっ

次。
賢太郎が好きだって言ってたからシティボーイズの舞台に行った。



４月２６日（木）雨
天王洲・銀河劇場

シティボーイズ（大竹まこと、きたろう、斉木しげる）が中村有志、ピエール瀧をゲスト

に迎えた舞台。「蓮と石ころ」を意味する題名、らしい。柔らかい植物と硬い鉱物の対比を表す喜歌劇、らしい。
一言で切り捨てれば、７２００円が取れる舞台じゃなかった。最後まで見ても題名の意味が何を表しているのかさえわからなかった。舞台の楽しみ方を知らないっていう私の未熟さもあるけれど、呆れるくらいフィルムを多用しながら肝心のコントはつまらないし、台詞はぐだぐだ。練習不足が窺える。
エンドトークでは「昨日の初日のときはピエールは台詞忘れたりしたけど、今日は進歩した」なんてこと平気で言ってしまう。これって、笑ってトークする内容じゃない。「みんなが見てるのに戸惑う」って言ったのは、きたろうさん。７２００円払ってるんだもの、どこかいいとこ見つけて帰りたいじゃないの。
大竹まことが佐伯しげるに言った「その辺でちょこちょこっと台詞覚えてた」ってツッコミが嘘に聞こえない怖さ。
賢太郎を髣髴とさせるコントもあったけど、大きく括ってシュールさが似てるっていうだけ。

いつもは緻密な台本を書く賢太郎だから「猿」の緩さの意外さが楽しめるが、シティボーイズの全体的に流れる緩さは怠慢に思えた。賢太郎がシティボーイズを好きな理由がわからなかった。
完全だから不完全に惹かれるのか、シティボーイズの面白さが違うものでは出ているのか。
でもそれを確かめることはもうしないと思う。

お花が沢山来てた。探したけど、賢太郎からのはなかった。

シティボーイズにはもう書くことがなくて
スペースが空いちゃったので
素っぽい顔の賢太郎で終わらせます。